

談話室

わが大学の思い出—リーハイ大学—

吉野 勇 一*

黒や赤のボールペンで滅茶苦茶に書き留められたメモ用紙、数日間も取り残されたままの投稿用の図表、はたまた今年度のペースアップ要求額をさも確実に獲得するかのごとく宣言している組合ニュースなどが乱雑に散らばつた机からふと目を転じると、壁に掛かつたカラーカレンダーに大書きになつている典型的アメリカ美人が微笑みかけている。

腐食速度を表示するのにあきれるほどに多数の（と言うよりは雑多な）単位が用いられていることに驚き、溶接入熱はいつでも Joule/cm だから単純でいい、などと思いつつも早くも三年の月日が流れ去つていた。一瞬、(本当に一瞬である) リーハイ大学の図書館の親切な（もちろん、美人でもあつた）受付の女学生を想い出したりする。もちろん、アメリカ美人について論考(?) するために筆を起した訳ではない。執筆依頼には「大学で学んだことの意味や面白い逸話」とある。私は決して優秀な学生ではなかつたし、むしろもつぱら他人の学を殊更に成り難きものにしていただけに、迷うことなく後者を選んだ。

さて、私は 1976 年から約三年間、リーハイ大学の学生簿の末端に名を連ねていた。それまでに留学した多数の日本人学生の中でも「お前のように勉強しない日本人は初めてだ」とインド人の友人に言わしめるほどの不良学生であつたので、勉強と研究は二の次、三の次にして、もつぱら教授連中の癖などを観察していたものである。

リーハイの金属学科にも他大学と同様、幾人かの著名な教授がいたが、名物教授といえやはり Dr. Pense をおいて他にあるまい。私の論文審査委員長でもあつたので、よく話をする機会があつたが気さくな、俗にいう教授らしくない人柄である。先生はいつも風のように現れて、こちらが言葉の不自由な外国人であることなど一切、気にかける風情もなく巻き舌でまくしたて、気がついた時には例の Pense Walk で、肩を振りながら大股で競歩選手のように廊下を歩いている、というようなお方である。

彼の先生はまた、ジョークの達人でもある。中でも傑作は試験問題におけるジョークであつた。大学院の Alloy Steel の期末試験であつたと記憶しているが全問、アメリカ独立に関するジョークであつた。記憶の糸を解きほぐしながら、その中の一つを書き記してみるとおおよそ、次のようであつた。白く、「第 1 問、1775 年のある日、ポール・リベア（独立の功労者の一人）は朝、

髭を剃つていたが、カミソリの切れ味が悪いのでメイドに刃を焼直すように命じた。当時、カミソリ刃はイギリスから輸入されていたのでリベアは、イギリスでの熱処理が劣悪であつたために切れ味が悪いのだと考えたのである。メイドから受け取つたカミソリ刃で再び髭を剃ろうとしたが、以前よりもかえつて切れ味が悪くなつていた。そこで彼はメイドに尋ねた。『焼入れには何を使つたのかね』メイドは『傍にあつたイギリス茶の中に焼入れました』と答えた。『それだ。イギリス茶がいかなのだ。』愛国者のリベア氏、吐き捨てるように言つた。さて、本当にイギリス茶が悪かつたのだろうか。諸君の意見を書き記せ。諸君はリベアほどに愛国的である必要はない。」というようなものであつた。

時はあたかも 1976 年、アメリカは建国二百年祭に沸き立つていたので学生達もこれを Bicentennial Quiz と呼んで大いに歓迎したものである。私なども試験中に思はず笑い声を出すほどで試験の方は余り身が入らなかつたのを覚えている。この他にもベンジャミン・フランクリンと砲身の割れの問題などもあつたと記憶している。私はそれ以前にボストンに数ヶ月滞在し、彼の有名なビーコンヒルのおんぼろアパートに住んでいたが、アパートの建つている通りの名前がリベア通りであつたので前述の問題をよく覚えているものであろう。

私のリーハイにおける恩師は、溶接界の草分け的存在である Dr. Stout であるが、先生についても一言、触れなければ片手落ちになる。私の在学当時、先生は大学院々長としての要職にありながら研究にも精力的であつた。現在は退いて研究に専念しておられることを後日、リーハイを訪ねた時に知つた。

先生はその端正な面立ちと身のこなし、また話しぶりから謹厳な Gentleman (先生は有名なペンシルベニア・ダッチの出身であるから本当は紳士であるはずがないのだが?) という印象を与えていたが、そのためか、あまり親しくない学生達には敬遠されるという一面もあつたようだ。

しかし、実は Dr. Stout もジョーク好きで気さくな面があることは意外と知られていない。その昔、教鞭を取つていたころはよく学生達をトリックにかけたとは、教え子の一人である Dr. Pense の話しである。白く、「よい焼入組織を得るためにはどうすればよいか。」優秀な学生が鋼の焼入性と冷却速度、冷媒の冷却能、云々について明解に答えた。彼の先生、これにうなずきながら、「君、一つ重大なことを忘れてるよ。よい焼入組織を得るためにはまず第 1 番に鋼を焼入温度に加熱しなければならぬんだよ。」と言つてニヤリとしたのだそうだ。

仕事の関係から、かつてリーハイで先生と一緒に Ph. D. コースにいたという人と会つたが、彼によると先生は元来、茶目つ気が多く、よく冗談を言つて人を笑わせ

* (株)日本製鋼所 材料研究所

たものだそうだが、奥さんの前に出ると威厳を身にまとうようになるのだとの裏話を聞くことができたのも面白かった。

以上のお二人の外にも、ソフトボールチームの一員だった Dr. Tarby などいろいろな先生とも親しくしていただいたが紙面の都合で触れられないのは残念だ。

話題があまりに個人的なことに終始したが、読者の中には今後、何かの事情でこれらの先生に会われる方もおられることと思うので、お人柄の紹介も満更、無汰なことでもないであろう。ともあれ、私にとつてのリーハイは、ここには触れなかつた多数の友人達にめぐり会えたこともあり、「遊」学の意義にあふれたものであつた。

国際会議報告

第 24 回国際耐火物会議

高 島 啓 行*

第 24 回国際耐火物会議 (XXIV International Colloquium on Refractories) は、1981 年 9 月 24~25 日、西独アーヘンの Aix-la-Chapelle において開催された。

アーヘン工科大学の鉱物冶金学研究所、ボンの耐火物研究所、デュッセルドルフの VDEh の共催で、参加国は 21 か国、参加登録人数は 400 余名であつた。

会議は、アーヘン工科大学の採鉱冶金学部長および鉱物冶金学研究所 W. Krönert 氏の歓迎および開会のあいさつで始まり、2 日間にわたり 20 の論文の発表と討議が行われた。論文の国別内訳は、西独 13、米、仏、

ハンガリー、ベルギーそれぞれ 1、そして日本からは 3 で新日鉄、品川白煉瓦、住友金属のそれぞれ 1 であつた。

本会議のメインテーマが“工業炉用耐火物とその省エネルギー利用”ということで、発表論文の大半がセラミックファイバーに関係するものであり、欧州においてもセラミックファイバーに関する研究が非常に熱心に行われていることがわかつた。

なかでも、セラミックファイバーの材質に関する論文が多く、その耐久性が焦点になつており、実炉への適用、施工法に関する論文は少なかつた。

会議全体の印象として、ドイツ語以外の発表論文に対する討議がやや低調なのが気になつた。

発表された個々の論文に対して、耐火物の専門外である筆者には残念ながら解説の能力がないが、下表に発表全論文の表題、著者、国名をまとめて示し、読者の参考に供したい。

No.	表 題	著 者	国名
1.	軽量耐火物の熱伝導におよぼす組織および材料特性の影響	H. P. Große	西ドイツ
2.	熱伝導率の測定方法の比較	L. Hagemann	"
3.	Al ₂ O ₃ -SiO ₂ 系高耐熱性セラミックファイバーの結晶生成挙動	R. Ganz W. Krönert	"
4.	断熱ファイバー製品の実験室テスト	P. Schroth 他 2	USA
5.	断熱材に対する種々のガス雰囲気の影響	P. Dietrichs W. Krönert	西ドイツ
6.	ファイバー耐火物の適用についての原則	J. Delobel 他 1	フランス
7.	耐熱温度 1600°C の多結晶耐火アルミナファイバー	E. Rastetter W. R. Symes	西ドイツ
8.	セラミックファイバーによる加熱炉の省エネルギーの理論と実際	H. Schulz	"
9.	カーボン材料およびグラファイトベースの断熱材の最高耐熱温度	F. Wagner	"
10.	鉄鋼業における耐火物と省エネルギー	K. Sugita 他 2	日本(新日鉄)
11.	セラミックの鉱物学的性質の研究と耐火イソライト材料の使用結果	J. Albrecht 他 4	西ドイツ
12.	セラミックファイバー内張りによるバッチ炉の燃料原単位の低減	M. Yoshinaga H. Takashima 他 3	日本 (住友金属)
13.	工業炉における耐火物の省エネルギー適用について	J. Mutch	イギリス
14.	金属の加工や運搬の容器に断熱耐火材料を使用する効果について	W. Klein	西ドイツ
15.	既設および新設加熱炉の耐火物構造による省エネルギーの可能性	N. Meyer	"
16.	省エネルギーのためのバッチ炉のライニングについて	K. Naito T. Nishina 他 1	日本 (品川白)
17.	工業炉の熱交換器用熔融耐火材料	T. Acs I. Horváth	ハンガリー
18.	Procédé PYROGUM de réparation à chaud des fours industriels	J. Piret	ベルギー
19.	冶金工場における省エネルギー耐火物の適用による省エネルギー	G. König W. Weitkämper	西ドイツ
20.	軽量耐火物製造のための高温トンネル炉のエネルギー消費の最適化	K. J. Schröder U. Leusmann	"

* 住友金属工業(株)中央技術研究所 波崎研究センタ